

本日の説教題は「み心のクリスマス」です。み心とは神様の定めた中でのことという意味です。クリスマスとは人がこの日をお祝いしようと思った日ではなく、私たちには思い知ることは出来ませんが神が定められた時です。思い知ることが出来ないなら私たちは何をすれば良いのでしょうか？ それは再度、クリスマスに込められた父なる神のみ心を追い求めることです。昔、未信者の知人がクリスマスは12月25日とされているけれど、実際は違う日だそうだね、とやや私を憐れむかのように言いました。12月25日が間違っているならキリスト教は信じるに値しないとでも言いたげな感じでした。ここで大事なことは何月何日何時何分に生まれたということが重要なことでなく、救い主が誕生したという事実です。新約聖書にでてくるギリシャ語で時を表すことばにクロノスとカイロスがあります。クロノスとは時計のように何時何分、あと何時間というニュアンスで時間を直接的にとらえます。他方、カイロスとは死ぬに時があり、生まれるに時がある、といったように事柄に重きが置かれます。そしてここでは、もちろん12月25日という日付も大切なのですが御子が生まれたという事実が大切なのです。その事実こそが2000年も昔のことが現代でも私たちの生き方に影響してくるのです。

クリスマスを迎える時期になると全世界の関心はマリアがみ使いから子を宿すことを聞いたナザレあるいはイエスが誕生されたベツレヘムといったイスラエルの地域に思いを馳せます。それはどことなく静かでメルヘンチックな光景が浮かんでくるかもしれません。しかし今年はずいぶん違います。そちらに心を向けると今、ユダヤ人とパレスティナ人が戦争状態にあります。生々しい現実がそこにあります。ではイエス・キリストが誕生した時は世の中はどうであったのかというやはりその当時の現実の中で主は誕生しておられます。現代とはもちろん違っていますがその時の政治状況、経済状況、社会状況の中で救い主の誕生があります。私たちはある程度、そのことを加味してクリスマスのお話やページェント（降誕）を聞いたり、話したりします。それは次のようなことです。皇帝アウグストゥスの勅令によって、ガリラヤのナザレに住むヨセフとマリアが、住民登録をするために、遠いユダヤのベツレヘムまで、マリアの出産が迫っていたのに旅をしなければならなかった。ようやくベツレヘムに着いた時、マリアはいよいよ産気づいた。あちこちの宿屋を探したが、どこも住民登録のための客で一杯で泊まれる部屋がない。それでマリアは、馬小屋で主イエスを産み、飼い葉桶に寝かせなければならなかった。だいたいそういうストーリーでページェントは構成されています。こういう話は物語としては面白いし、メルヘンチックだし、またそれなりのメッセージを含んでいます。つまり、時の権力者の身勝手な命令に振り回される貧しい庶民の苦しみの中で救い主イエスがお生まれになったのだということが一つ。また、この日ベツレヘムに住んでいた人の中に、あるいは宿屋に泊まっていた人の中に、今にも子供が生まれそうになっている貧しい夫婦に手を差し伸べ、自分の家や部屋に迎え入れて出産をさせてやろうとする人は一人もいなかったということ。つまり「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」と7節にあるけれども、それは単に部屋が空いていなかったということではなくて、人々の心に、困っている貧しい夫婦を迎え入れようとする思いがなかった、それほどまでに人々の心が荒んでいたことを意味している。そのように誰にも迎え入れられず、顧みられない中で、主イエス・キリストはお生まれになったのだ、というのがもう一つです。私もこれまで、クリスマスにはよくそういうお話をしてきました。この箇所からそのようなメッセージを読み取ることは間違っていないと思います。

ただそこで出てくる特に為政者である皇帝とマリア達に産む場所を用意してくれようとはしなかった宿屋の主人たちは本当はどうだったんだろうかと考えてみるとまた別の姿が浮かんできます。まず皇帝アウグストゥスについてですがこれは名前ではありません。その意味は「尊敬されるべき者」であり、名前はオクタビウスと言います。彼の後にキリスト教の迫害が起こってきます。ローマ皇帝というそれ

だけで悪の代表であるかに見てしまいますがそうではありません。むしろ誰からも尊敬されるぐらい優秀であったのです。ユダヤのヘロデ王の方が悪どいことをやっています。人口調査でヨセフの故郷ベツレヘムに行かざるを得なくなったことや、これがユダヤ人から見れば税金を取り立てる根拠となっていることを思うと確かに怒りと屈辱を感じるのも無理のない面があると思います。ただこういうことは皇帝アウグストゥスの気まぐれや勝手な思いで起こされたことではありません。皇帝アウグストゥスは在位中に3回人口調査をしたと言われていますが当時はこの国においても統治する者の必須のこととしてなされていました。むしろローマが支配していた地中海沿岸の世界全体において見るならば、皇帝アウグストゥスは、この地域全域に平和をもたらした名君とされていました。「パックス・ロマーナ」(ローマの平和)ということばがありますがこの時期にいろいろな産業や商業活動、文化活動が盛んになりました。この時期に多くの富があったがゆえに数多くの公共建築・建設がなされました。例えば「すべての道はローマに通じる」と言われているようにローマに通じる道路網が確立したのはこの時期です。そして後の時代にあれほど短期間に全世界に福音が伝わった要因の一つはこの道路網があったからです。

次に宿屋の主人たちのことを考えてみましょう。私たちはヨセフとマリアがベツレヘムについた途端、産気づいて必死に宿屋を訪ねたがどこでも断られて、行くところがないので苦肉の策として馬小屋で生まれ、飼料おけに寝かされたと理解しています。自分が儲かることだけを考える自分勝手な宿屋の主人たちと受け取ったりもするのです。ただ6節には「ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて」とあります。どれぐらいそこに(ベツレヘム内の恐らくヨセフの親族や家族かと思われる)いたのでしょうか。「彼らがそこにいる間」とありますから2時間や3時間のことではないでしょう。マリアは少し前にはもうベツレヘムにはいたのです。マリアは月が満ちてとありますのでそこまでじっと待たれるぐらいの時間ではないかと推測します。私は何も以上のことを取り上げて、みことばに難癖をつけようとしているではありません。ただ神様がルカを用いて今日の箇所を記されたのは理不尽なことをする為政者、心の冷たい宿屋の主人たちのことをクローズアップさせたかったのかと言えばそれだけではないと思えます。むしろ俯瞰的に歴史を見るならば世界のすべての人を救う救い主が誕生するには場所と言ひ、時期と言ひ、この時期、この場がベストであったと言わざるを得ません。そして最大の驚きはクリスマスは預言が成就したということです。今日の箇所と言うなら「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」ミカ5:2 キリスト降誕の700年以上も昔に告げられた預言がその通り成就しているのです。これだけではありません。誕生から十字架における処刑まで数多くの預言がすでになされているということです。これは何を意味しているのでしょうか。一見、キリストの降誕は政治、経済、社会情勢、人の心にも翻弄されているように見えても、全てのことを本当に支配し、導き、用いておられたのは主なる神様だということです。これは個人の人生においてもそうです。

現代は国際情勢、国内のこと、あるいは個人的な生活においても不安なことや憂慮すべきことが多々あります。しかしそれらはすべて主イエスの父なる神様のみ手の中にあるのです。それらすべてを用いて主は救いのみわざを成し遂げてくださいます。そのことを覚えて私たちも、この国に、国際社会に、家庭に、正義を行い、平和を実現するための働きを積極的に担ってゆきましょう。

メリークリスマス！